

#### 4月18日「新しい命」コロサイの信徒への手紙3：1～11

今日の聖書日課に示された、マタイ福音書のイエスの言葉です。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがりますが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」この言葉は、気持ち的にズシンと来しました。この数日間、私が考えていることと真逆だったからです。イエスはあちこちで、病の人を癒し、悪霊を追い出し、素晴らしい神のみ言葉を告げて回っていました。人々はこの人こそ神様が約束されたメシアかもしれない・・・と信じ始めていました。けれどもどうしても確証はありません。なんとか最後の一押し、イエスがメシアである根拠、何か「しるし」が欲しかったのです。けれども、イエスは言われます。そのような態度は「よこしまで神に背いている」と。「しるしは与えられない」と。

この2年ほど、保育園のために行政とのやり取りを続けています。行政から補助金を貰うのはなかなか大変で必ず「根拠」が求められます。最初は面倒に感じましたが、皆から集めた「税金」を使わせてもらうのですから、当然と言えば当然です。さらに、この1年、私たちはコロナ禍の中にいます。ニュージーランド、ドイツ、台湾、コロナへの対策に非常にうまくいっている国は、科学的な根拠に基づいて、リーダーシップをもつ者が一貫して迅速に対応しています。私たちの国では、それが全く足りない。論理的に確かであることの大切さを日々感じさせられています。

そんな私にとって、今日の言葉は重く響きました。イエスは「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがると言われます。論理的な整合性を求めるのは間違っているのでしょうか？「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、私は決して信じない**」12弟子の一人であったトマスはそう口走ってしまったがためにキリスト教会で「**疑う者・不信仰**」の代名詞とされてしまいました。けれども、私にはトマスを責める資格はありません。私もその一人だからです。疑い、よこしまで、神に背く者、不信仰の最先端にいつもいるのです。

そんなことを思いながら、ドイツの首相のアンゲラ・メルケル氏のキリスト教に基づく講演を集めた『わたしの信仰 キリスト者として行動する』

を読みました。彼女は物理学で博士号まで取得しているようで、評価されているコロナへの対策は科学的な思考の背景から生み出されるものではないかと思います。一方で牧師の娘として生まれ、信仰者としての側面を持っています。彼女はマルコ福音書5章にあるヤイロの娘を生き返らせ、長血を患った女性が、イエスの衣に触れて癒された物語についてこう書いています。

「この物語は難しいのです。少なくともわたしのような人間はどうしてそのようなことが可能なのか（つまりイエスがどうやって長血の女性を衣に触れるだけで癒したか）、知りたいと思います。ひょっとしたらわたしが物理学を学んだとき、すべては何らかの方法で説明可能だと信じたからかもしれません。聖書のこの物語は正反対のことを教えます。人はすべてを説明することはできない。（52頁）将来、わたしたちは疑いなくさらに多くのことを、自分の生命に関して、知るようになるでしょう。思考はどう機能するのか、感情はどのようにして生まれるのか。にもかかわらず—これがこの物語の励ましとなる部分なのですが—どうしても説明できない多くのことが残されるでしょう。まさにその点が、人間と他の生物との違いであり、まさにそのことをわたしたちはキリスト者として受け容れ、認めるのです。説明のできないこと、説明したくないこと、説明を許されないことがあるということ。それによって、私たちには他者をありのままに受け容れる責任が与えられるのです。そのようにして、わたしたちは謙虚な気持ちを持てるのです。謙虚とは無気力の謂（いう）ではなく、無限を知ったことから生まれるポジティブで、希望に溢れて生を形成する感覚です。（54頁）」

「私たちには説明できないことがある。そこで知った謙虚さが私たちに無気力ではなく、ポジティブで希望に溢れた命に生かすことになる」メルケル氏はイエスの起こされた奇跡をそのように解しているらしいのです。私としては、ストーンと腑に落ちたように感じました。これは、単に、信じて何もしなくて良いと言う話ではありません。この数日、各地で首長選挙が行われています。福岡では県知事選挙の投票率が29.6%で過去最低だっ

たようです。これだけ、コロナで自治体の政策が、自分たちの生活に直結することが分かったのに、日本有数の大都市で7割もの人たちが自分で選ぶことすら放棄している。それは良くないと思います。そういう、諦めや無気力ではなく、自分で、考え、調べて、動いてみる、とことん自分たちでやってみる。しかし、その先に、神さまは私たちの考え以上のものを用意してくださっている。ということです。

今日のイエスの言葉です。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」よこしまで、神に背いた、疑い深く、しるしを欲しが私たち。そんな私たちにイエスは言われます。「預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」しるしは全く与えられないのではありません。預言者ヨナのしるし、つまり、ヨナが三日三晩魚の腹の中にいて、そこから救い出されたように、イエスも三日の後に、お墓の中から復活されるのです。そう、疑う私たちに、私たちの知識でも言語でも説明しがたいしるしが与えられるのです。その時、神の圧倒的な無限の力の前に、私たちは謙虚にされ、希望に溢れた生へと招かれるのです。

コロサイの手紙は、そうやってイエスの復活に預かった私たちを新しい命に生きる者としてポジティブに生きるよう勧めています。「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」コロサイの手紙の最も有名な言葉が続きます。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」メルケルも「私たちに説明できない出来事がある、そのことが、私たちには他者をありのままに受け容れる責任が与えられる。」と語りました。コロサイの手紙もキリストの復活が私たちを主イエスに倣う者へと変えてくれる。私たちを無気力な者から愛する者へと変えてくれると言うのです。

復活節、イエスが現わしてくださったヨナのしるしを思う季節に、もう一度わたしたちは、神が私たちには説明できないことをなさるといこと

を知りたいと思います。キリストの復活は疑い、しるしを求める不信仰な私たちのために与えられた最大のしるしです。イエスは疑うトマスに言われます。「**信じない者ではなく、信じる者になりなさい**」信じる者へと、積極的に愛に生きる者へと私たち自身が変わられていくことを祈りましょう。